発達理論の学び舎

Back Number: Vol 68

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

1341. 顕在意識下の自分と無意識下の自分の齟齬

1342. ウィルバーの新著と固有の霊性

1343. 夢とMOOCと人工知能

1344. 欧州南下の旅と自己と人類の幸福のために

1345. 小鳥のさえずりの中で

1346. 学術論文の可能性について

1347. 英才教育について思うこと:幼少期の没入体験の価値

1348. 自著に触れた感動と最後の最後の日に向けて

1349. 幸福と解放の実現に向けて

1350. 発達科学者かつ複雑性科学者としてのパスカル

1351.『風雅集』の近くへ:「人工知能の哲学」の探究へ向けて

1352. 創造衝動と自由の実現に向けて

1353.「私たちは常に今というこの瞬間の時間と空間を生きているんだよ」

1354. 人工知能の研究と二人の日本人画家の作品より

1355. 所有を超え、幸福感になるということ

1356. 自己に課す機械学習

1357. オランダ政府への感謝

1358. 微風駆け抜ける世界の中で

1359. 金曜日に思う作曲

1360. ゴールデンゲートブリッジでの思い出より

© YOHEI KATO 2018

1341. 顕在意識下の自分と無意識下の自分の齟齬

夜にもかかわらず人があちこちに溢れる東京の街を歩いている夢。どうやら私は、有名な二人の日本人の格闘家の試合を観戦するために、人ごみをかき分けながら東京の街を歩いているようだった。ガラス張りの三階建ての建物が、その試合の会場だった。そもそもこの街は渋谷だろうか。見たことのある風景がそこに広がっている。

この風景は、欧米の都市の感じとは異なっており、やはり東京のそれであり、渋谷のそれだ。試合会場の建物が視界に入ると、すでに入場者が辺りに溢れていた。いや、よくよくそれらの群集の数を考えてみると、明らかに会場の収容量を超えている。おそらく、彼らは会場の外に取り付けられた大型スクリーンを見ながら、試合のパブリックビューイングを行うためにそこにいるのだろう。

会場を遠目から眺めながら、私はそのようなことを考えていた。会場に群がる人々ではなく、自分自身について改めて考えてみると、そういえば観戦チケットなど持っていないことに気づいた。どうやら、私もパブリックビューイングをするらしい。今回の試合に関して、二人のうちどちらを応援すればいいのか少しばかり戸惑う。

自分の心の中で、一応どちらを応援するかを決めてから、会場の近くに到着した。すると、ガラス張りの建物の最上階に、自分が応援しようとしている格闘家がウォーミングアップをしている様子が見えた。同時に、もう一方の格闘家が二階でウォーミングアップをしている様子を確認した。私は観戦チケットを持っていなかったのだが、一応その建物の中に入ってみることにし、一階から四列ほどの大きなエスカレーターを登っていくと、二階が試合会場らしかった。

二階のトイレに立ち寄り、その建物から出て、パブリックビューイングの会場に行くと、なんとすでに試合が終わっていた。結局、私が応援しようと思っていた格闘家が勝利を飾ったようだった。二人の格闘家のインタビューが大型スクリーンに流れており、両者が互いの健闘を讃え合っている姿には清々しいものを感じた。清々しさを感じたところで、私は夢から覚めた。

起床後、いつもと同じように一杯の水を飲む。水を飲みながら、夢を見ていたあの自分について考えていた。起床して今この瞬間に水を飲んでいる自分と夢の中の自分がどうも同じ自分ではないような感覚。顕在意識下の自分と無意識下の自分との若干の齟齬。

© YOHEI KATO 2018

夢の中の自分が夢を見ていることに気づけない不思議さともどかしさ。仮に気づくことができればそれは明晰夢となり、だがそれでも、明晰夢を見ている自分と顕在意識下の自分が完全に合致しないような妙なズレの感覚。

以前見た、顕在意識下の自分と無意識下の自分が鉢合わせとなり、お互いに一瞬戸惑った表情を見せたあの滑稽な夢。論文の存在意義も論文を書くことの理由も未だに謎めいているが、夢というものも未だに謎のベールに包まれている。

今の私は、わからないものだらけの世界の中にいる。自己を取り巻く未知の世界が大海のようであるならば、その海水をコップで一杯一杯飲みながらでも、大海の謎を明らかにしていきたいと思う。
2017/7/24(月)

1342. ウィルバーの新著と固有の霊性

午前中、少しばかり眠たかったので、仕事を中断し、寝室に向かい、しばらく仰向けになって休息することにした。確かに昨夜は思考が興奮状態にあり、寝つきが悪かったのだろう。そのせいもあり、午前中に仮眠を取り、仕事の速度をいつもよりゆったりとしたものにすることにした。

30分ぐらいの時間が経ったであろうか、突然、閉じられた瞼に白い強烈な光を感じて目を覚ました。寝室の窓から外を眺めると、光など感じられないほどに、空が雲で覆われていた。白い閃光のような光を知覚する体験についてぼんやりと考えながら、再び書斎に戻った。すると論文を執筆することについて、少しばかり考えが前に動いた。

やはり論文は、探究したいテーマを自ら選び、探究対象の現象を解明したいという止むに止まれぬ衝動に基づいて執筆していくべきものであるため、そこに他者の視点を入れてはならないと思った。真っ先に求められるべきものは、探究に伴う私的な喜びであり、対象の深くへ入っていく喜びの中で文章を建築していくことの喜びである。論文を他者のために書こうという考えや何かに直接的に役立てようとする考えは、単なる欺瞞だろう。

社会の進展や学術の進歩に繋がり得るというのは結果であって、そもそもそれを論文執筆の動機においてはならない気がする。動機の出発点は、徹頭徹尾自分の中になければならない。動機の

根源は、非常に私的なものでなければならない。でなければ、内側の止むに止まれぬ衝動に基づいて論文を書くことなどできないだろう。

自分の内側から湧き上がる、止むに止まれぬ衝動に基づいて書かれない論文は、時の重みに耐えることなどできはしない。それは一瞬で消え去ってしまうような密度しか保持し得ない。そのような論文であってはならない。そのような文章であっては決してならないのだ。

自己をだけを見つめる。「利己的」でも「自己中心的」でもなく、自己超越的に自己だけを見つめながら論文を執筆することが何よりも重要だ。他者を意識することは、表現の制約につながる。それを徹底的に避けなければならない。

仮眠を終えた後、ケン・ウィルバーの新著であるRTを読み進めていた。ロバート・キーガンの発達理論に対応させると、この書籍の中で詳細な記述のある段階6や段階7については理解が追いつく。しかし、段階8や段階9になると、それは概念的な理解ですらも難しい。概念的かつ体験的な理解の遠く及ばない領域が、自分の前にそびえ立っていることを改めて知る。

高次元の段階特性について考えを巡らせていると、ウィルバーが本書で指摘するように、高次元へのアレルギーと高次元への中毒という二つのパターンが現代人の多くに見られるように思う。高次元の現象が、自己の概念的理解と体験的理解を凌駕している場合、そうした現象の存在を一切認めようとしないアレルギーが生じる。一方で、高次元の現象が存在することを概念的に知った場合、それを盲目的に追い求めようとする中毒と、高次元の現象を一度体験として得ると、その味に酔わされ、一時的な体験に取り憑かれるという中毒現象がある。

大別すると、多くの現代人はこの二つのパターンのどちらかに該当するのではないだろうか。健全な霊性を持ち、そしてそれを育むためには、この二つの罠に陥ってはならない。高次元へのアレルギーは霊性の排除に繋がり、高次元への中毒は霊性の偶像化に繋がる。霊性というのは排除されるものでも崇められるものでもなく、絶えず私たちのすぐそばにあるものなのだ。

というよりもむしろ、私たち一人一人は、固有の霊性が具現化された存在であるということを思い出さなければならない。2017/7/24（月）

1343. 夢とMOOCと人工知能

グレン・グールドが演奏するモーツァルト――グールドが毛嫌いしていた――のピアノソナタ全集が終わりを告げ、バッハ――グールドが敬愛していた――の楽曲全集が始まりを告げた。ここ数日間、グールドが演奏するバッハを何時間聴いただろうか。書斎にいる間はずっと聴いていたから膨大な時間に及ぶだろう。それでもまた聴きたくなるあの不思議な魅力。

昨年の夏、ライプチヒを訪れた際に足を運んだバッハ博物館の記憶がにわかに蘇る。同時に、バッハ博物館を訪れる前に足を運んだ、シューマン博物館とメンデルスゾーン博物館で体験したあの振動を伴う美的感動を思い出した。あの夏の記憶の断片が、一つのまとまった記憶として再想起される時、また一歩自分の内側で何かが深まった感触がある。

夕方の休憩中、今朝見た夢についてもう一度振り返っていた。そして、夢を振り返ることそのものについて考えを巡らせていた。私は、夢の記憶が残っている時にはできる限りその夢を書き留めておくようにしている。様々な目的があるが、それは一つに、夢の中の記号的意味を自分なりに明瞭なものにすることが挙げられる。

夢の世界は、自然言語では捉えきれないほどの記号言語で満たされている。そうした記号言語の意味を一つ一つ可能な範囲で自分なりに解きほぐしていくことが、内面のシャドーの理解を促すのみならず、内面世界そのものの成熟を促すことにつながると思うのだ。日々の夢を書き留めることは、シャドーワークの実践につながるのみならず、シャドーを通じた自己理解と自己成熟を促していく。興味深いのは、内面の成熟に合わせて夢の性質が変化しているのかしていないのか分からないことだ。

そもそも人間の無意識は成熟するのかどうかについても気になっている。ユングや井筒俊彦先生の無意識についての説明を見てみると、確かに無意識にはいくつもの階層が存在していることがわかるが、顕在意識の発達のように、ある階層の中に留まり、そこからさらに深い階層に向けて進化していくという動きを無意識の運動の中に見てることは難しい。無意識の階層は、ある種の状態変化の質的差異を示しているのかもしれない。夢の世界が立ち現れる無意識については、今後も自らの体験を通じて探究を続けていこうと思う。

夏季休暇も一ヶ月が過ぎ、ちょうど折り返し地点に差し掛かる頃であり、そろそろ二年目の研究に向けた準備を進めていこうと思う。そう思った時、二年目の研究で主に取り上げるMOOCと人工知能の今後の関係について考えていた。今後ますます人工知能を活用した学習が進展し、それはとりわけMOOCにおいて顕著に見られるだろう。そのような予感を強く持っており、夏季休暇の後半は人工知能に関する専門書を読み進める予定だ。

それに並行する形で、二年目の研究データを収集し、それを加工する作業を進めていきたい。具体的には、フローニンゲン大学が過去に提供したMOOCの一つである「複雑性・不確実性と意思決定」というコースを題材に、七月中にデータを集め、八月中にデータを加工しておきたい。先日少しばかりデータ収集を行ったところ、いくつか研究仮説が思いつき、それをメモしていた。さらにデータ収集を進める中でまた新しい仮説が生まれてくるだろう。

研究者として嬉しいことだが、今回の研究データは質と量ともに充実しており、様々な角度から研究を進めていくことができるため、まずは何に焦点を当てるかを明確にする必要があるが、重層的な研究を継続的に行えそうであることに期待感を持つ。2017/7/24（月）

1344. 欧州南下の旅と自己と人類の幸福のために

ポツポツと断続的な雨が降る一日が、静かに終わりに向かっている。今日は午前中に突発的な睡魔に襲われたが、仮眠を取って以降は随分と精神が研ぎ澄まされていたように思う。精神の研ぎ澄まされている微妙な度合いの差が、もはや手に取るようにわかるようになってきている。精密さを追いかけた末に辿り着く、精密な差の把握。精密な差の把握が可能になることによって生まれる全体把握。精密な部分の集合とその集合の総和を凌ぐ全体の完全理解。

自らの内側の世界を量子論的世界の厳密さを持って把握し、そうした究極的なミクロの世界とは対極にある究極的なマクロの世界から自らの内側の世界を全体として一挙に把握したい。微視的な眼と巨視的な眼を涵養し、それを内面世界の距離的把握のためだけに用いるのではなく、時間的把握のためにも用いることができるようにしたい。

夕方、イタリアに呼ばれた。イタリアという国からの手まねきに遭遇し、それが意味するものは何かについて考えようとしていた。昨年の夏、日本を離れる前日の夜に宿泊していた成田のホテルで、私

はノルウェーに呼ばれた。だから今年の夏はそこに行く。数ヶ月前、エジプトとギリシャ、そしてトルコ西部の古代都市エフェソスに呼ばれた。だから近々私はそこに行くことになるだろう。

今日の夕方はイタリアだった。雷雨が降り始めた時、その突発的な出来事の要因や理由など説明できないのと同じように、イタリアに呼ばれたその現象を説明することなどできない。以前、母からバチカン市国の魅力について聞いたことがある。来年のどこかで、フィレンツェ、ミラン、ローマへと旅をしたい。

頭の中でヨーロッパの地図を広げてみる。フローニンゲンから始まり、ブリュッセル、チューリッヒ、ミラン、フィレンツェ、ローマへと南下していく旅。各都市に何泊かし、ゆっくりとヨーロッパを南に下っていく旅の情景が、眼前に見える赤レンガの家々よりも鮮明に見えた。個別具体的な観光名所から逆算的に生み出される偽りの旅ではなく、直感的な全体把握から、ある国や都市が自然と浮き上がる真の旅であるがゆえに、この旅の道を歩いてみたいと思った。私は本当に、来年のどこかでこの欧州南下の旅に出かけるかもしれない。

朝一番の自分の考えを一日の最後にもう一度考え直させられていた。絶え間ない健全な自己批判と自己修正。地に向かう精神自殺ではなく、天に向かう精神自殺を絶えず繰り返していかなければならない、という昨夜の就寝前の考えについても、どうしてもさらに一歩深く、かつより正確に書き留めておきたいのだが、今はそれをしない。

明日以降にそれを行いということをここに明記しておく。今日の朝一番に私は、論文とは徹底的なまでに自己の喜びを満たすことから出発しなければならない、ということを書いていたように思う。出発地点と立脚地点が自己にあるのはいい。だが、喜びを満たすのみならず、論文は自己を幸福さで満たすためのものでなければならないということも付け加えておきたい。そして、論文は自己の幸福に資するためにあるのであれば、やはりそれはひるがえって人類の幸福に資するものでなければならない、という考えを持った。

「論文は人類への手紙である」と述べたウンベルト・エーコ。手紙をしたためる自分自身が幸福感に包まれ、幸福感の中に溶け出していくことが起点となる。その起点から、人類へ向けて手紙を差し

出すことによって、人類の幸福に資するようにしなければならない。自己の幸福と人類の幸福に向けて論文を書き続けることができるのであれば、全てのものを喜んで差し出す。

今朝一番の「自己の喜びを満たす」というのは、もしかすると、自己の全てを喜んで差し出すことを示唆していたのではないだろうか。そして、天に向かう絶え間ない精神自殺を自己に課す、という昨夜の考えも、自己の幸福と人類の幸福に資するために論文を執筆し続けることに直結していることがわかる。

論文の存在意義、そして論文を書くことの理由の大きな端緒が光のように注いできた。これから光のない、夢を見ない深い夢の世界の中に行く。明日の起床直後から、蜘蛛の糸と全く同様の細く繊細な、今日の夜に触れた一筋の光を太く太く育てていきたい。内側の世界に光を見出そうとすることは、もはや止めなければならない。

そうではなく、一つ一つの光を自分自身で生み出し、太い光の束を幾重にも折り重ね、内側の世界を光で満たしたい。それこそが、天に向かう精神自殺の究極地点であり、自己の幸福と人類の幸福に向けて論文を書き続けることの絶対的な拠り所となる。2017/7/24(月)

1345. 小鳥のさえずりの中で

うっすらとした柔らかい雲とそこから透けて見える青空。今日は晴れのようだ。起床直後、身体の調子が良いことに気づく。肉体的な身体の各器官の機能がしっかりしているというだけではなく、身体全体を駆け巡るエネルギーの調子がいいのだ。

昨夜は、一日を締めくくる前に、今日という明日に向かって畳み掛けるように文章を書いていたように思う。それがあっての今日。昨日の様々な気づきを引き継いで、初めて今日という一日を歩いていけるという実感。昨日に気づきがあったという実感があり、今日もまた新たな気づきがあるだろうという実感がある。

気づきがあったという過去と気づきがあるだろうという未来と、両者を絶えず実感する現在の中で生きること。そのような日々に対して、これ以上望むことのできない充実感とたまらない幸福感を覚える。そして、この充実感と幸福感はとても質素な感情であることに気づく。それらはとても慎ましいのだ。

あまりにも密度が濃いがゆえに、それらの充満する感情の中で、私は静かにならざるをえない。この充実感と幸福感の表面は爆発的な感情エネルギーで覆われているが、その核にあるものは静寂である。その静寂さが大変慎ましいもののように感じるのだ。

小鳥たちがいつもより勢いのある鳴き声を奏でている。ずっと聞いていたくなる、そんなさえずりだ。書斎を流れるバッハの音楽よりも美しい音色を奏でていたので、居てもたっても居られなくなり、小鳥の鳴き声が聞こえる寝室の窓に向かった。フローニンゲンの清澄な朝の世界を、小鳥の鳴き声が包む。決して逆ではない。この街の中に小鳥の鳴き声があるのではなく、小鳥の鳴き声の中にこの街がある。私は、この街に響き渡る美しい音色にただただ聞き入っていた。

今日は早朝に、毎朝の習慣である、カントの“Critique of Pure Reason”を音読する。その後、ダイナミックシステム理論の方法論的な論文を四本ほど読む。夏季休暇も一ヶ月が過ぎたところで、改めて書斎の机の上を眺めてみると、論文の山の一つが消えた。それらの四本の論文を読み終えることをもってして、机の一角を占めていた論文の小高い山が消えることになる。

論文の山が消えるごとに、私の内側には一つの山が出来上がっていく。そんな感覚がある。それらの論文を読み終えたら、サイバネティクスの創始者であるノーバート・ウィーナーの“The Human Use of Human Beings (1950)”に取り掛かる。本書は200ページ弱なので、本日中に読み終えることができるのではないかと思う。とても心の踊る一日の始まりに、感謝の念しかない。2017/7/25(火)

1346. 学術論文の可能性について

早朝より論文を読み進めていると、突然雨が降り始めた。鳥の鳴き声が止み、ただ雨の音だけが聞こえてくる。木々や地面、そして書斎の窓に打ち付けられる雨音にしばし耳を傾けていた。不規則な雨音を聞きながら、これをデータとして集め、一つの時系列データとして解析をかけるとどのようなことが見えてくるのだろうか、と興味を持った。

昨夜就寝前に最後に読んでいた論文は、定常性(stationarity)と非定常性(non-stationarity)を持つ時系列データの解析理論に関するものである。時間が経過しても平均や分散などが変化しないのが定常性の特徴だ。逆に、時間の経過に応じて平均や分散などが変化するのが非定常性の特

徴だ。今目の前に降り注いでいる雨は、定常的にも思えるし、非定常的にも思える。どちらなのだろうか。

雨が止み、再び小鳥のさえずりが聞こえ始める。雨と小鳥の交響曲。それぞれがお互いのパートを担当しており、どちらか一方が音を鳴らす時、もう一方は来るべき時に備えて音を出すことを控えている。そんな様子が見て取れる。

それにしても今日は、雲の流れがとても早い。灰色をした薄い雨雲が足早に西から東へと駆け抜けていく。太陽の進行方向とは逆向きに、力強く雲が進んで行く。小鳥の鳴き声と雨が同時に鳴り始めた。自然が奏でる交響曲も終盤に近づいているのか、それともここが最大の山場なのか。世界を浄化するような雨が降り注ぎ、雨の恵みを感じる。

午前中の仕事はとても順調に進んでいる。朝の時間をいかに充実したものにするかは、以前から意識していることであり、それが完全に定着するようになった。午前中の仕事の充実ぶりは、自らの身体のバイオメカニズムに沿った睡眠と起床によるところが大きいだろう。就寝時間に関しては基本的に一定であり、基準時間を早まることがあっても遅くなることはないように気をつけている。一方、起床時間については若干の変動性を設けるようにしている。それはその日における顕在意識下での活動や夢の世界での活動に応じて、睡眠の質が必然的に変化するからである。

太陽の光で自然と起きることを実践し始めて、早いもので十年以上の時が経つ。内側のリズムと外側の自然界のリズムの調和の中で生活を形作ること。こうした生活を送ることによって、多大な充実感と幸福感がもたらされる。

定常性と非定常性、さらにはそれらに付随してエルゴード性について、改めて専門書を通して確認していると、一粒の雨のしずくと同じほどの大きさの啓示を得た。辻邦生先生が小説の可能性について見出した「幸福の実現」は、学術論文を通じても可能であり、実際にそれを可能にしなければならないと思ったのだ。

学術論文は内在的に、小説と同じほどに人々に幸福をもたらす力を秘めている。私にとって、それはまだ可能性の範疇に収まっており、それをいかに実現させていくかが最大の課題だ。だがこの啓示は、一粒の雨のしずくと同じほどに大切なものだった。2017/7/25（火）

© YOHEI KATO 2018

1347. 英才教育について思うこと:幼少期の没入体験の価値

昼食前にメールを確認すると、編集者の方から連絡が届いていた。幸いにも、拙書『成人発達理論によるの能力の成長』が増刷となった知らせであった。その知らせを聞いた時、成人発達理論の知見が徐々に日本の方に伝わっていることを嬉しく思った。これからも様々な形で、知性発達科学の知見を多様な領域の方に知っていただき、それぞれの領域で活用されるようになることを願う。

午前中の雨が止み、今は曇り空が広がっている。自分の仕事はこんなところでは終わらない。最後の最後の日まで、自分のなすべきことを継続させていく。

午前中にふと、幼少期の時にいかに何かに没頭した体験を持つかの重要性について考えていた。社会で普及している早期英才教育の中には、非常に大きな問題だと言わざるをえないものがある。それは、前作と今作の書籍の中でも言及したように、子供たちの発達段階を無視した教育のあり方だ。それは往々にして、詰め込み教育を中心とした、過剰な情報を子供に押し付ける形でなされる。

特に、具体的な体験から乖離し、抽象的な概念を子供たちに押し付ける訓練は、教育ではなく拷問である。これは知的鍛錬のみならず、身体的な鍛錬においても同様であり、過度なトレーニングは往々にして子供たちの発達を阻害してしまう。そもそも、子供たちの脳や知性はそうした拷問に耐えるようにできていないのである。知的鍛錬だけを考えてみても、将来において抽象的な概念を組み立て、それを実践の場で活用する思考運動ができるためには、何よりも抽象的な概念を扱う前の感覚運動的な知性をいかに豊かなものにしておくかがカギを握る。

それは、抽象的思考の前の具体的思考の基礎に当たるものであり、身体感覚を伴う知性をいかに育んでいくかの教育はもっとその重要性が強調されてしかるべきだと思う。しかも、そうした身体感覚的知性というのは、何か特別な鍛錬の中で育まれていくというよりも、これまでの時代においては、自然との触れ合いの中や遊びの中で培われるものであったように思う。

だが、現代社会においては、自然との触れ合いもめっきり減り、遊びの性質もかなり変容してしまっている。当然ながら、単純に自然との触れ合いを増やし、昔の遊びのようなものを取り入れることは、現代の英才教育を取り巻く問題の具体的な解決策にならないかもしれない。

科学技術が進歩し、そうした技術を積極的に導入した教育が施される現代社会の潮流を止めことはできないがゆえに、新たな技術を活用した教育のあり方についても真剣に考えていかなければならない。同時に、科学技術の活用のみならず、やはり科学技術を通じてでは体得することのできない自然からの学びについても再考する必要があるだろう。

生々しい自然の世界と触れ合って初めて得られるあの豊かな感覚や、自然を通じて育まれる豊かな感性の価値を、このような時代であるからこそなお一層見直したい。書斎の窓から見える自然の景色に、私は毎日どれだけ多くのことを学んでいるだろうか。その学びは計り知れず、成人になった今でも、感性の寛容に自然との触れ合いは欠かせない。感受性の豊かな子供であれば、いったいどれほど多くのことを自然から学び、それがどれほどまでに感性の育成に寄与するのだろうかと考えざるをえない。

常に外側の自然の世界に触れながら日々の探究を続けたい、と気持ちを新たにした。

一昨日と昨日にかけて、ケン・ウィルバーの最新作RTを読んでいる時に、高次元の意識段階に到達するためには、幼少期の没頭体験が重要であるという気づきが芽生えた。午前中に考えていたのはまさにその点だ。

幼児期において身体感覚を豊かに育み、幼少期においても継続的に身体的知性を育みながらも、その時期に何か一つでも熱中の中に自らを溶解させるような体験をすることができたのであれば、それは将来において高度な知性を獲得しうる重要な土台になるのではないかと思う。

没頭する対象など何でもいいのだ。それがどれくらい継続するかどうかも正直なところ問題ではないと思っている。重要なのは、幼少期の頃に、止むに止まれぬ衝動を持って打ち込んだものが一つあるかどうかだ。自分自身を振り返ってみると、それは迷路を描き続けることであったり、図鑑を眺め続けることであったり、いくつか思い当たることがある。

そして何より、小学校二年生の時に、ある日の日記の執筆に没頭し、日記そのものと一体化するという没入体験を経験したということ。その体験は、当時から数十年経った今の活動の根源的な基盤となっている。あの日のあの日記がなければ、今の自分の探究活動はないだろう。抽象的な概念を

受け付ける前の最後の時期に、あのような体験を積むことができたのは本当に幸運であったと今になって思う。

感覚運動段階と具体的思考段階の時期に、一つの対象に自己を没入させ、ある種の「非二元」の状態を経験できたかどうかは、成人になって非二元や空の意識段階に向かっていくための無くてはらない体験エネルギーとなるだろう。そして、私にはそうした幼少期の体験が、本質的には一人の人間の一生涯にわたる幸福の源泉であるように思えて仕方ないのだ。2017/7/25(火)

1348. 自著に触れた感動と最後の最後の日に向けて

今日は嬉しいことが続く。昼食前に編集者の方から増刷の連絡を受けたことに加え、ようやく『成人発達理論による能力の成長』の実物を手にすることができた。実は、著者用の書籍は全て献本していたということと、日本からオランダにわざわざ書籍を送ってもらうことを控えていたため、出版から一ヶ月以上経とうというのに、まだ自分の書籍に直に触れたことがなかったのだ。

上の階に住むピアニストの友人が日本に一時帰国したついでに、本書を持って帰ってきてくれたおかげで、先ほどようやく自分の書籍に触れることができた。実際の書籍を自分の手に取り、ページをめくっていると、とても感慨深いものがあった。

やはり書物というのは電子書籍ではダメなのだとつくづく実感する。書籍の重さ、書籍のカバーと中身のページの質感、書籍の香りを含め、それらが全て一体となって初めて一冊の書物となる。現在、コンピュターサイエンスの最先端では、ヴァーチャル情報が触覚や嗅覚などに作用する研究が進められているようだが、その研究成果が電子書籍に取り入れられるのはまだ先のことだろう。

仮にそのような日が来たとしても、私はやはり紙媒体の書籍を愛し続けると思う。電子情報というのは現代社会の重要な文化的創造物だが、紙媒体の情報は太古から受け継がれる人類の文化遺産である。長大な時間をかけて築き上げてきた人類の文化遺産を守るためにも、今後も私は紙媒体での書籍と論文を愛し続けたいと思う。

読みに読み、書きに書く、いつも通りの一日。読みに読み、書きに書くということが呼吸と同じ実践になり、一日一日を積み重ねていく欧州での日々。

昨年の第一弾の作品と今年の第二弾の作品を愛しながらも、それらを一刀両断する形で自分の仕事だけに邁進していく。何も始めていないし、何も残していないということに絶えず自覚的になり、絶えず自分の表現物を生み出していくことだけに専念する。

敬愛する辻邦生先生がシェイクスピアを引き合いに出し、職人的な誠実さを持って絶えず作品を生み出すことだけに専心した態度を規範にしなければならない。人知れないところで絶えず書く。誰にも見られていなくても絶えず書く。絶えず絶えず書き続け、自らの存在が消滅したその後の世界の誰か一人が、自分の書いたものに触れてくれるだけでもいいという気持ち。自己が解体し、自己が溶解しても書き続けるというその気概。

そして、その気概すら生じない超越状態の中で書き続ける自分を作り出していく。絶えず読み、絶えず書く。自己も他者も社会も顧みず、読みに読み、書きに書くことによって初めて、自己と他者と社会が見えてくるという明々白々なこの感覚。読みに読み、書きに書くことが己の幸福となり、それが他者の幸福につながる次元まで、読みに読み、書きに書くということを行っていくという決意。

この決意はもはや言う必要もなければ、その存在も必要ない。なぜなら、もはや私はその決意に他ならないからだ。決意など持つものではなく、決意にならなければ何の意味もないお題目である。そのような決意を通して、夕食後のこれから、そして明日の早朝から最後の最後の日まで読みに読み、書きに書く。

読みに読み、書きに書く。読みに読み、書きに書く・・・。2017/7/25(火)

1349. 幸福と解放の実現に向けて

ぬるめのお湯に満たされた浴槽にゆったりと浸かった後、先ほど夕食を済ませた。相変わらず今日も涼しい気温であり、さらには雨が断続的に降り注ぐような一日だった。幸い明日は晴れるらしい。

バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンが絶えず音楽作品を創出したように、シェイクスピアや辻先生が絶えず文学作品を創出したように、森先生が絶えず思索的エッセイを執筆し続けたように、そして井筒先生が絶えず論文を執筆し続けたように、自分も自らの表現物を絶えず創出し続けたい。

本日初めて手にした第二弾の作品を眺めていると、自分の仕事は本当にこれからだという気持ちを持つ。第二弾の書籍が出版されてから一ヶ月が経つ。そこから私はあの書籍と同じだけの量を持つ文章を一連の日記として書き続けた。第二弾の最初の原稿を書き上げたのは今から七ヶ月前であり、それ以降、私はあの書籍の七冊分に匹敵するだけの文章を一連の日記として書き続けた。

これらの一連の日記には、決して書籍にすることのできない大切なものが詰まっている。気づかないうちに、日記の数が1350に近づいている。

第二弾の作品は、これまでに執筆された1350のうちの10個ほどの日記から生まれたものだ。私が文章を不定期的にここに書き留めるようになったのは、米国での三年目の生活が始まってからである。当時は、毎日日記を書くことなどなく、日記の体をなしていなかった。米国での最初の二年間は、別の場所で日記を書き留めていたが、あの当時はとにかく日本語で文章を書き留めたくなかった。

今となって振り返ってみると、あの当時になぜ日本語で日記を毎日書き留めておくことをしなかったのかと少し悔やまれるが、そんな後悔を今してもしょうがない。だがもしかすると、今の私は毎日日記を書き続けることによって、失われたあの当時の日々を取り戻そうとしているのかもしれない。

サンフランシスコの日々とニューヨークの日々。そこでの体験を思い返してみると、今と全く同じほどの質感と重要性を持っていた。当時の体験を全て再想起することなど不可能であり、それらを一生取り戻すことはできないと知りながらも、今の私は毎日日記を書くことによって、あの失われた日々を取り返そうとしているのかもしれない。そんな試みは不毛であると知りながら。

しかし、毎日日記を書くことによって、一日一日がどれほど大切なものなのかを噛み締めることができているこの日々は本当に幸せだ。幸せな日々は、この一瞬一瞬の幸福の粒子に気付けるかどうかにかかっている。

幸福さと儚さは表裏一体である。日々の生活の中で見るもの、感じるもの、聞くもの、それら全てのものが今というその瞬間の体験なのだ。儚く過ぎ去るものの本質に気づき、それを存在の髄から感じることが幸福さを私にもたらす。儚く過ぎ去るものをもはや見逃したくないのだ。それらを見過ごすことなく、儚さを見つめ、儚さで満たされることが幸福さで満たされることなのだ。

© YOHEI KATO 2018

論文。論文を書くこと。論文の存在意義と執筆理由。それらに関する考えをなんとかまた一歩でも前に進めたいと思っていた。科学的な論文と哲学的な論文を一括りに論文と呼び、自己の幸福と他者の幸福の実現に向けて論文を執筆し続けることを何としてでも始めたい。

論文を執筆したいという熱情的な衝動が内側にあり、もはやそれが叫び声として漏れ始めている。あとは、それを実際の論文という形にして世の中に送り出し続けることなのだ。そのためには、今の知識量と経験量ではダメなのだ。それらが絶望的に欠落しているというよりもむしろ、絶望感など生まれようがないほどに知識と経験が欠落している。その自覚を強く持ち続けたい。

仮に知識と経験の欠乏感が、自分の内側のシャドーによるものであれば、そのシャドーこそ自分にとってなくてはならない存在であり、それを治癒することなど決してしてはならない。シャドーに無自覚になるのではなく、シャドーを自己と分離するのでもなく、さらにはシャドーを自己に再統合するのでもない。自己とシャドーを超えた存在者として日々の探究活動に打ち込むのだ。読みに読み、書きに書くというのはその次元の存在者を通じてなさなければ意味がない。

論文の存在意義とその執筆理由について、また少し新たなものが見えた。論文の存在意義と執筆理由は、幸福の実現に合わせて、「解放(emancipation)」をもたらすことにある。今の私には、論文の存在意義と執筆理由が“freedom”や“liberty”と呼ばれる「自由」の実現だとは言えない。そうではなく、解放の実現に向けて論文を執筆したいと強く思う。

論文を絶えず書き続けることを実現させるために、知識と経験をこれからも毎日積み重ねていく必要がある。幸福と解放の実現に向けて、とにかく毎日読みに読み、書きに書く。2017/7/25(火)

1350. 発達科学者かつ複雑性科学者としてのパスカル

今日は数本の論文を読み、午後からはサイバネティクスの創始者であるノーバート・ウィーナーの“The Human Use of Human Beings (1950)”を読んでいた。この書籍を読んでいると、現代社会で注目を集めている人工知能に関する議論を進める上での非常に重要な洞察を含んでいることに気づかされた。

コンピューターに目的意思を持たせるという発想やコンピューター自身が学習できることを実現させるという発想は、現在の人工知能を語る上で不可欠なものだろう。本書を読み進める中でその他にも、発達理論の観点から考えてみた時に、ダーウィンの発想に一つ共感するものがあった。

ダーウィンは、ラマルクが抱えていたような「上へ上へ」の上昇的な進化思想を持つのではなく、多方向的な進化のプロセスを自発的な現象であると認め、以前の段階の特性を引き継ぎながら進化が実現されるという発想を持っていた。予定では本書を今日中に読み終えるつもりだったが、少しばかりゆっくりと読み進めようと思ったので、本書を読み終えるのは明日になりそうだ。

夕方、森有正著『デカルトとパスカル』を読んで、一つ喜ばしい大きな発見をした。それは、パスカルが偉大な発達論者であった、ということである。パスカルは、意味を構築する秩序機能が発展的に深まっていくことを見抜いていた。意味を構築する秩序機能が、低次の段階から高次の段階に深まっていくということを見抜いていただけではなく、高次の段階は低次の段階を包み、低次の段階は高次の段階を支えているという特性も見抜いていたのだ。

パスカルの慧眼はそれらに留まらない。段階が高次のものに至るためには、「自己否定」が不可欠であることを見抜いていたのだ。「下から上へ行く道は自己否定によるほかは超えることのできない無限の深淵によってへだてられている」というパスカルの指摘がまさにそれを示している。

さらに、意味を構築する秩序機能が高次のものに至るにつれて、質的に全く異なる新しい意味を開示するという点もその通りである。そして最も私を驚かせたのは、パスカルが発達論者としての洞察を持っていただけではなく、複雑性科学の洞察を持っていたことであった。

パスカルは、こうした秩序機能の進展の道は真っ直ぐかつ平坦なものではなく、不断の自己否定を重ねながら進められる非線形的な道であることを見抜いていたのである。パスカルの存在がまた少し自分に近しいものとなった。この偉大な哲学者の思想についても、自分自身の存在に即してじっくりと向き合っていきたいと思う。2017/7/25（火）

1351.『風雅集』の近くへ:「人工知能の哲学」の探究へ向けて

真っ赤に輝く朝日が寝室に差し込み、今日という一日を開始させる。サッカー日本代表の能力開発に携わり、主要メンバーの何人かと話をする夢を見た。特に、「戦術理解能力」と「戦術実行力」に関して話を聞き、それら両者のメンタルモデルをより高度なものにしていく方針を固める。能力開発の担当強化責任者としてだけではなく、代表の試合に自分も出場しているような夢だった。

夢から覚め、朝日を拝むと、今日は予報通りの晴れであることがわかった。昨日は、第二弾の書籍がようやく自分の手元に届き、初めて実物に触れた時の思いや感覚について書き留めていたように思う。

書斎の机の左上の一角は、和書を数冊ほど置くスペースとなっている。その一角に自分の書籍を置き、昨日は何度か自分の書籍を読み返していた。執筆時の思い出もさることながら、本文の題材となっている出来事の思い出も喚起され、色々と思うことがあった。改めて実物の書籍を手に取り、ページを自分の手でめくることは、やはりPDFの原稿を眺めている時と全く違うものを自分の内側に喚起させてくれた。

自分の書籍を本棚に収納しようとした時、そこでも感慨深いものがあった。自分の書籍を、敬愛する森有正先生、井筒俊彦先生、辻邦生先生の全集と同じ本棚に収納することの畏れ多さと感動の念。自分の書籍の近くには、辻先生の美学の真髄が込められた『風雅集』が置いてある。なぜかその書籍がとても大きな存在感を放っているように思えた。

今日は午前中に、昨日読みかけていたノーバート・ウィーナーの“The Human Use of Human Beings (1950)”を読み進めたい。残りは半分ほどである。その後、南アフリカの哲学者ポール・シリアーズが執筆した“Complexity & Postmodernism: Understanding Complex Systems (1998)”を読み進めたい。この書籍はタイトルにあるように、複雑性科学とポストモダニズムの思想を取り上げている。

より厳密には、本書はジャック・デリダやジャン＝フランソワ・リオタールの思想をもとにして、複雑性科学の発想を探求する内容になっている。ここ最近は、複雑性科学の中でもダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスに関する方法論的な論文を読むことが続いていたため、哲学的に複雑

性科学を捉え直す試みをしたいと思うようになっていた。方法論的な理解と哲学的な理解を螺旋状に深めていくという探究方法を、私は自然と採用しているようだ。午前中は、まずこの二冊に取り組みたい。

科学と哲学を行き来する日々が続き、昨夜はふと、「人工知能の哲学(philosophy of artificial intelligence)」に関心が向かった。むしろ、当該領域を探究する必要性に突然襲われた、と言っても過言ではない。

以前に少しばかり人工知能の話題に触れていたが、その時よりも明確に人工知能の哲学という分野を自分なりに開拓していこうと思った。決してコンピューターサイエンス的に人工知能と関わるのではなく、あくまでも哲学を通して人工知能と関わるあり方を徐々に構築していきたいと思う。

先日購入した人工知能に関する三冊の専門書は、まさに「人工知能の哲学」という分野に括られるものだったのだと改めて気付かされる。当該領域の探究に並行して、「心の哲学(philosophy of mind)」の領域も探究を進めていく必要があるだろう。自分の仕事の裾野が広がり、多様な領域を少しずつ深めていくことによって、一つの堅牢かつ巨大な体系を構築していきたいと思う。2017/7/26(水)

1352. 創造衝動と自由の実現に向けて

午前中、サイバネティクスの創始者ノーバート・ウィーナーの書籍を読み終えた。本書の主題とは関係のない一つの文章が印象に残っている。芸術家、作家、科学者は、その仕事に対価が払われるか否かに関係なく、創造衝動に基づいて動かされるべき者である、という記述に立ち止まらずを得なかった。この文章に心を打たれるというよりもむしろ、それは自分の思いを代弁してくれるものであったがゆえに、私に確信と共感の念をもたらした。

「創造衝動」なるものが、今の私を動かしているのは間違いない。そしてそれは、自分の中でまだまだ隠されたものであり、それを顕現化させることが可能であるのみならず、それを育んでいくことができるという思いに駆られる。

いくつかの白く分厚い雲が青空をゆったりと行進している。進みゆく雲を眺めながら、これから自分はどこまで進みゆくことができるのかをぼんやりと夢想する。

爽快な夏の日の午前。フローニンゲンの爽やかな風がこの街を駆け抜けていく。その風に乗ってどこまでも遠くに行きたいと思った。

私が勧めた、辻邦生著『小説の序章』を父も購入したとの連絡が先日あった。本書には、辻先生がパリで苦心して見出した小説の意味と創作方法が凝縮されている。私は辻先生の形而上学的かつ美的な作風をとても好んでおり、父にもそのような作品を執筆してほしいというこちらの勝手な思いからこの書籍を勧めた。おそらく、この書籍を勧めなくても、父の作品には形而上学的な要素や美的な要素が宿るだろうと信じている。

昨日、父から連絡を受けた。その連絡の内容は、実家に置いていた皮の鞄にカビが生えていたので手入れをした、というものだった。返信メッセージの最後に、小説の進捗状況について尋ねてみた。他の仕事との兼ね合いから、今はまだ事実関係の洗い出しと物語構造を練っているような段階だそうだ。その返信を受けた時、確かに父は紛れもなく私の父だと思った。

仮に私が小説を執筆するのであれば、そのような思考プロセスを辿ると思ったのだ。いや、おそらく父の創作の進め方は私のそれよりも圧倒的に緻密なものだと思わされた。

私はふと、徹底的な緻密さを通して書くことと同時に、「思いのまま書く」ということを父にしてほしいと思った。自らをがんじがらめにするほどの緻密さを要求しながらも、同時に自由を要求する。父に対する期待は、そのまま自分のシャドーの投影であることに気づいた。まさに私も、なんとかして論文を徹底的な緻密さとともに自由が体現されたものにしたいと思う。

作品から緻密さと自由が溢れ出すことに加え、執筆過程そのものが緻密さと自由に裏打ちされたものでなければならない。それらの片方ではダメなのだ。

昨日、私は論文の存在意義と執筆理由に関して、幸福の実現のみならず解放の実現という新たな意味を見出した。昨日の日記の中で、私は「自由」という言葉に言及しながらも、その言葉を用いず、「解放」をよりふさわしい言葉とした。だが、本来人間は、解放の先にある超越的な自由を希求する

© YOHEI KATO 2018

存在であり、それを享受するべき存在だという考えが湧き上がった。その瞬間、「解放」という言葉が「自由」という言葉に真に変容した。

秋の足音を感じさせる優しい太陽光が辺りに降り注いでいる。一羽の鳥が、大空に羽ばたくのを見た。緻密な羽を緻密に羽ばたかせ、思いのまま自由に飛び立つ一羽の鳥。あの鳥のように、緻密さと自由が体現され、幸福と自由をもたらすような論文を書き続けたいと思う。その行為を始められないもどかしさにいかに苦しめられたとしても、私は絶えずこの地上と天だけを見つめ続けたいと思う。2017/7/26(水)

1353.「私たちは常に今というこの瞬間の時間と空間を生きているんだよ」

今日は午後から歯医者に行ってきた。半年前に親知らずを抜いた時に、定期的に歯の検診に行こうと決意し、あれから早いもので六ヶ月が経った。

午後二時前に自宅を出発すると、さわやかな風に全身を包まれた。八月に入るというのに全く暑さを感じさせない気温である。とはいえ、さすがに長袖を着ることをせず、今日は半袖で出かけた。自転車に乗る人たちの中には長袖を着ている人も見かけたが、運動がてら歩くことにしている私にとっては半袖がちょうどいい。歯医者に向かうまでの道中、私は幸福な感覚に満たされていた。

少しばかり雲がかかった青空、道端に咲く花々、吹き抜ける風の存在を確認するたびに、それらは私の幸福感をさらに強めていく。歯医者に行く途中にある郵便局に立ち寄り、再来週に迫った北欧旅行に向けて、万一のために100ユーロ(13,000円)だけお金を下ろした。

財布の中に入っている現金が常時4ユーロ(520円)ぐらいしかなかったので、北欧を旅するにはさすがにそれではまずかろうと思ったため、念のため100ユーロを下すことにした。調べてみると、デンマークにせよノルウェーにせよ、クレジットカードでの支払いが普及しているそうなので、100ユーロの現金すら必要なかったのかもしれないが万一のためである。

昨年の年末、日本に一時帰国した際に、財布に現金が200円しかなく、東京から実家への新幹線に乗車する前に昼の弁当を購入しようとしたが、お金が足りず、昼食は150円の大きめの缶コーヒーだけとなった記憶が蘇り、思わず笑みがこぼれた――新幹線の駅でクレジットカードが使えないのは

不便だ。東京五輪の際に世界中から日本円を持たない観光客が多数訪れた時にどのように対応するのだろうか。弁当が売れない機会費用は大きいように思う──。昼の弁当が買えなかったあの時も幸せであったし、その当時の記憶を思い出す今の私も幸せだ。

フローニンゲンの爽やかな夏に全てが溶け込んでしまいそうな感覚が続く。この世界には地獄や修羅が存在しているのは紛れもない事実だが、私たち人間はやはり、幸福を追求し、幸福の中に生きることが善なのだ。幸福感のない人生は善き生き方ではない。この世には善も悪も存在し、幸福も不幸も存在するのは確かだ。だが、それでも私たちは善と幸福で満たされた人生を歩んでいこうとしなければならない。

人間の発達もそうだ。それは善にも悪にも転びうるし、幸福にも不幸にも転びうるのだ。しかし、それを善と幸福の側に向かって成し遂げることも十分に可能なのだ。そして、私たちはそうしなければならない。

街の中心部に位置する教会が見えてきた。教会が見える運河を渡ろうとすると、太陽光が運河に反射し、水面がきらめいていた。「こんなところにも世界の輝きを見て取ることができるのだ」という言葉が思わず漏れた。歯医者の入り口に到着すると、歯医者から出てくる人が親切にもドアを開けてくれ、私はお礼を述べた。受付の女性が笑顔で挨拶をし、私も笑顔で挨拶をした。

名の知れぬ人々とのやり取りがこれほどまでに幸福感をもたらし得るものだということに、私は改めて感激していた。予約した時刻よりも早く着いた私は、待合室で哲学者ポール・シリアーズが執筆した“Complexity & Postmodernism: Understanding Complex Systems (1998)”を食い入るように読み進めていた。

「この本は面白い。得るものが多くある」という言葉が絶えず頭の中を駆け巡っていた。複雑性科学を文字通り科学的な観点で捉え、科学的なアプローチを通してその知見を活用するのではなく、哲学的な観点から捉え、哲学的なアプローチを通してその知見を活用していくことが大事である。そうした私の思いを代弁し、より深くより豊かな視点で複雑性科学を哲学的に解きほぐしている本書はとても参考になる。書籍の世界に入り込んでしばらくすると、担当の歯科医が出迎えに来てくれた。

© YOHEI KATO 2018

もはや何の違和感も感じなくなっていたのだが、そういえば、いつもこの歯医者では歯科医が握手とともにクライアントを迎える。治療が終わった後も握手だ。ふと、かかりつけの美容師であるロダニムも髪の毛を切る前に握手を求め、握手で終わることをふと思い出した。ロダニムのところに行くのは来週だ。こうした些細な行動の中に、その国の文化を見る。

米国での生活の一年目、なかなかハグの文化に慣れることができなかったことが懐かしい。検診を終えると、担当の歯科医から、歯茎を鍛えるために毎日特殊なスティックを使うことを勧められた。実は六ヶ月前にも、別の歯科医からそれを勧められていたのだが、歯茎の一つ一つの隙間にスティックを通していく作業が億劫になり、早々に断念してしまっていたのだ。歯科医の言いつけを守っていなかったことが専門家から見れば一目瞭然だったのだろう。今日からは毎晩スティックを使って歯茎の鍛錬をしたいと思う。

歯科医を後にした私は、行きつけのチーズ屋に立ち寄ることにした。チーズ屋の近くに差し掛かると、以前から気になっていたアパレルショップがより強い存在感を発しているように思えた。とても品のあるアパレルを備えており、毎回この店を通る前に中を一瞥すると、その雰囲気と取り揃えられているアパレルが、自分好みのものであることを感じていた。正直なところ、フローニンゲンという街は北欧にほど近いため、それほど気温差はないだろうと思ったが、カーディガンが今は手元にないことを思い出し、北欧旅行のためにそれを購入したいと思った。

店内に入った瞬間、とても居心地の良い雰囲気が漂っており、初めてこの店に入ったにもかかわらず、常連客のような気持ちになった。すぐさま、オランダ人の中年女性が対応をしてくれ、自分の感性に合致するようなカーディガンを見つけることができた。カーディガンを二着購入することにし、この際にそれに合わせてシャツも二着購入しようと思った。お目当ての品を揃えたところで会計に向かおうとすると、自分に言葉を投げかける靴を見つけた。

そういえば、ビジネス用ではなくプライベート用の靴を最後に購入したのは、ロサンゼルスに住んでいた頃であったから、かれこれ三年前のことだと思い出した。結局、靴も二足購入することにし、久しぶりに社会生活用の物品を購入したことに満足感を覚えた。本日購入した六点の品々は、どれも大事に使おうと思う。物には魂はないのだが、物に魂を込めることは可能なのだから。

© YOHEI KATO 2018

対応をしてくれた女性との雑談の中で、北欧旅行について言及することがあった。その女性も北欧はとてもお勧めだと述べていた。私はお礼を述べ、店を後にした。その店を出て歩いてすぐのところに、行きつけのチーズ屋がある。チーズ屋に入ると、店主の女性と一人の初老の男性が楽しげに会話をしていた。

私は店主に挨拶をし、アーモンドを含め、いくつかのナッツが混ぜ合わさったものを300g、マカデミアナッツを200gほど軽量スプーンですくい上げた。店内のマットを踏む最初の一歩の右足の動作、店主に挨拶をする言葉、ナッツ類に向かうまでの歩数、ナッツ類を袋に詰める動作など、それらの全てが一つの物理方程式で記述できてしまうのではないか、という考えが思い浮かび、危うくクスクス笑い出しそうになった。また、自宅からここまでの歩行経路のパターンも限定的であり、自分の生活圏内の範囲もひどく限定的であることを踏まえると、ネットワーク理論を活用すれば、これもまた一つの方程式で記述できてしまうと思った。

相変わらず店主とその男性は会話を続けていた。お気に入りの一年発酵もののオーガニックチーズに手を伸ばし、振り返ると、その男性が満面の笑顔で私にオランダ語で話しかけてきた。

初老の男性:「XXX, XXX, XXXXX?」

私:「Kunt u Engles spreken?」

初老の男性:「あぁ、こんにちは。この街で勉強しているのかね？どうだね、この街は？」

私:「こんにちは。ええ、この街は素晴らしくてとても気に入っています」

初老の男性:「そうかね。それを聞けて嬉しいよ」

とてもありふれた会話の出だしの中で、私はたまらない幸福さを感じていた。とても人の良さそうなその初老の男性は、上機嫌な状態を維持したまま、私にあれこれと質問をしてきた。その後、私たちはしばらく会話のキャッチボールをしていた。長崎の出島の話、日本のサブカルチャーの話、そして私がノルウェーに来週から行くことを伝えると、ノルウェーの天然資源が豊かなこと、ノルウェーの

社会保障や教育について話が及んだ。雑談が落ち着いたところで、その男性がとっさに話題を変えた。

初老の男性:「君の専門は知性の発達だったね。私は歴史と地理を専門としていたんだ。この二つの特徴は何かわかるかね？」

私:「歴史と地理の特徴ですか？」

初老の男性:「そう。歴史は時間を、地理は空間を探究するものであり、我々は現在という歴史と地理の産物であることに気づいたことはあるかね？私たちは常に今というこの瞬間の時間と空間を生きているんだよ」

その言葉を聞いた時、ハッとさせられるものがあった。今というこの瞬間の時間と空間の連続の中で私は生きているのだということに対して、とても神妙な気持ちになったのだ。

初老の男性は私に手を差しのばし、私たちは固い握手を交わした。その男性は最後に私に向かって、「この夏を楽しみ、この街でのこれからの探究も充実したものになることを願っているよ」という言葉を投げかけてくれた。私はその男性とチーズ屋の店主に笑顔で挨拶をし、チーズ屋を後にした。

フローニンゲンの街を通り抜ける風が頬を伝った。この街を照らす太陽が妙に光り輝くものに思えた。私は絶えず幸福さと光の中で、今というこの時間と空間を感受し続けたいと思った。2017/7/26（水）

1354. 人工知能の研究と二人の日本人画家の作品より

一日の仕事をそろそろこの辺りで止めようと思う。今日はとても充実した一日であり、幸福感に満ちた一日だったと言える。明日も今日のような日であることを願う。時刻は九時に近づいているが、辺りは一向に明るいままである。

来月あたりから少しずつ日が沈むのが早くなるだろう。そういえば、昨夜の夢は、自分が博士課程に進学し、人工知能について探究するような内容だったことを思い出した。しかも私の指導教官は、

それほど交友関係のなかった友人だった。当時の友人の学業成績を考えると、指導教官の地位に至るまでに随分と研鑽を重ねたのだと思う。

何のわだかまりもなく、私は友人が指導教官であることを受け入れ、彼から出来る限り多くのことを学ぼうと思った。興味深いことに、私は事前に彼に対して、哲学的な観点から人工知能の探究を進めていくと申し出をしていたはずなのに、なぜか彼は優しい笑顔を浮かべ、少し恥ずかしそうに、実際の人工知能を自らの手で作ることを私に要求してきた。

MOOCの中に自分の作った人工知能を導入することができるのであれば、それはそれで悪くないと思い、私は博士課程の課題の一つとして人工知能を作ることになった。昨夜の夢はそのような内容だった。

今日は久しぶりに日本茶を飲んでひどく感激した。上の階のピアニストの友人が日本に一時帰国し、静岡の煎茶をお土産に持ってきてくれた。その煎茶は、以前に親友のピーターからもらった鹿児島県産の煎茶と同様に美味しかった。私は行きつけのチーズ屋に行く時、時々その近所にあるスーパーで寿司を買う。

夕食時に、その寿司を食べながら煎茶を飲んだ。両者の組み合わせは、言わずもがなで日本を思い出させた。日本を離れて日本を思い出すこと。これもまた幸福な瞬間であることに変わりはない。

最後に書き留めておきたいのは、今日の午前中に偶然ながら、二人の興味深い日本人画家の作品に出会ったことだ。一人は今の私と同じぐらいの歳に亡くなった画家であり、もう一人は現在活躍している同年代の画家である。この二人の女性画家に多大な感銘を受けたのは、二人が肉の眼だけではなく、心の眼、さらには魂の眼を持ってこのリアリティを眺めていることだった。このような眼を持って生み出された作品は、とても力強いエネルギーを放っている。

それらの作品はグロスエネルギー（gross energy）ではなく、サトルエネルギー（subtle energy）やコーザルエネルギー（causal energy）を放っている。おそらく、肉の眼だけで彼女たちの作品を眺めようとすると、高次元のエネルギーを感じ取ることができないだろうと思われる。

© YOHEI KATO 2018

肉の眼しか持たない者はグロスエネルギーしか感じることができず、より高次元の眼を持っている者はより高次元のエネルギーを感じ、それを享受することができると考えられる。人間が生み出す作品として、さらに高度な非二元のエネルギー(non-dual energy)を発しているものはなかなか見かけることができないため、今日発見したそれらの作品は、人間が生み出すものの中では非常に高次元のエネルギーを放っているように思えた。そうした作品に触れることができたことも、今日の不思議な幸福感の連続的な波を生み出すことにつながっていたのかもしれない。2017/7/26(水)

1355. 所有を超え、幸福感になるということ

昨夜は就寝前に、聞きなれない音が外の世界に響き渡っていた。それは鳥の鳴き声でもなく、何かがはじけるような音であり、それが絶え間なく聞こえていた。寝室から外の様子を見ても、それが何かわからず、書斎の方に駆け寄って外を眺めてみると、それが花火であることがわかった。それに気づいたときには、ちょうど最後の花火が空に上がった後だった。私は最後の花火が残した煙を静かな気持ちで眺めていた。七月も終わりに差し掛かったこの夜に、私は花火の煙を見た。

今朝は五時半過ぎに起床し、六時前から今日の仕事を開始させた。いつもと同じように、前日に見た夢についてぼんやりと振り返っていた。昨夜も何かしらの夢を見ていたのだが、その印象は強くない。無理に夢の内容を思い出すことをせず、無意識の世界をそっとしておこうと思った。

無意識も顕在意識と同様に、様々な種類の変動性を持っており、昨夜はその変動性が安定していた。そのような時はそっとしておくのが一番であり、無意識もそれを望んでいるだろう。

書斎の中に、グレン・グールドが演奏するバッハの曲が高らかに鳴り響く。小刻みかつ足早に流れていく一連の曲が、自分の脳をくすぐる。外はまだ静まり返っており、微風が時折通り過ぎていく。微細に振動する外の世界とは異なる意味合いで、グールドの演奏は微細な振動の波を発している。自分の脳と全身がその微細な波に呼吸を合わせていく。まるで自分の存在が小刻みに踊っているかのようだ。

早朝の私は冷静に、もう一度昨日の事柄を振り返っていた。具体的な事柄ではなく、昨日の本質であった幸福感の凝縮についてである。

昨日は、途切れることのない幸福感の連続の波が、一つの大きな幸福感という大海を生み出し、私はその海の中にいた。濃縮された幸福感に絶えず包まれながらすべての事柄を眺め、そして感じているような一日だった。幸福感の中にいるというよりも、自分が幸福感と一体となり、自己の存在が幸福感そのものであるかのような感覚が常に生じていた。自己の究極的な姿は幸福感に違いないのだろう。

幸福感は「所有する(have)」ものではなく、「なる(being)」ものなのだろう。幸福感は所有されることを待っているのではなく、なられることを待っているのだ。

今日はまず、毎朝の習慣である、カントの“Critique of Pure Reason”を数ページほど音読する。そして、次に取り掛かるのは、昨日半分ほど読み進めた“Complexity & Postmodernism: Understanding Complex Systems (1998)”である。複雑性科学とポストモダニズムに関する、著者のシリアーズの洞察から得るものが非常に多く、彼の別の書籍もまた読んでみたいと思わせてくれる。その後、米国の哲学者かつ認知科学者でもあるジェリー・フォーダーの“The Modularity of Mind (1983)”を読み進める。

昨日の仕事を終える前に、本書の表紙を眺めたり、中身をパラパラと確認していると、昨年の春あたりに本書を少し読み進めていたことがわかった。一読した箇所も含め、再度全体を通して本書を読みたいと思う。自分の精神の核を不動点とし、その核を通じて、今日も静かに読みに読み、書きに書く一日としたい。2017/7/27(木)

1356. 自己に課す機械学習

早朝、ポール・シリアーズの“Complexity & Postmodernism: Understanding Complex Systems (1998)”を読み終えた。随所に洞察に溢れる記述があり、複雑性科学と発達科学を架橋させる哲学論文を執筆する際に、この書籍を参考にすることになるだろう。本書を読みながら随分と多くの下線を引き、多くの書き込みを行った。再読時にまたどのような気づきや発見がもたらされるかが今から楽しみである。

先週末のオンラインゼミナールでは「自己組織化」と「創発構造」について取り上げた。結局、自己組織化の末に生み出される新たな段階としての創発構造は、どのようなものなのかは事前にわから

ない。もちろん、構造の特性は多くの発達理論によって明らかになっているが、それが具体的にどのようなものであるかは個人によって差があるのだ。言い換えると、その構造特性がある個人の中でどのように発揮され、どのように体験されるかには随分と個人差があるのだ。それはやはり、自己組織化を生み出す要素が各人多様であるということと、置かれる環境も多様であるということが影響しているだろう。こうした特性ゆえに、発達をあらかじめ設計するようなことはできないのだ。

哲学者のザカリー・スタインがかつてある論文の中で、「子供を設計することと子供を育てることは全く異なる」と指摘していたように、成人の発達においてもその違いに留意しなければならない。発達プロセスを完全に予測することや発達プロセスを事前に設計することは、複雑性科学の観点から見ても不可能である。

では発達支援者に何が求められるのかということ、そして何ができるのかということについて、シラーズの書籍は大きな洞察をもたらしてくれた。それらのいくつかは、これまで自分が考えていたことの延長線上にあるものもあれば、全く新しいものもある。今後の日記の中で、少しずつそれらについて言及したいと思う。

昼食前にランニングに出かける前に、米国の哲学者かつ認知科学者でもあるジェリー・フォーダーの“The Modularity of Mind (1983)”を少し読む。本書を読み終えたら、残りの時間は久しぶりに森有正先生の日記をゆっくりと読みたいと思う。シラーズの書籍の中で脳神経科学とコンピューターサイエンスに関する記述がちらほらとあり、その中でも「バックプロパゲーション（誤差逆伝播法）」という概念は面白いと思った。これは機械学習におけるアルゴリズムの一つである。

神経回路網がバックプロパゲーションによって絶えずインプットをモニタリングしながらアウトプットを生み出し、その過程の中で学習を続けていくように、自分もインプットを絶えずモニタリングし続けながら絶えずアウトプットを生み出す必要があると思わされた。ここでいうインプットとは、書籍や論文から得られる情報も含まれるが、環境との相互作用によって生み出される思考や感覚もアウトプットではなくインプットとみなし、それを文章として書くというアウトプットに絶えず変換していくことを自らに課す。

これは、コンピューターが行う機械学習的な営みかつ、人間が行う建築的な営みとして実行させたい。コンピューターが機械学習によって内側のアルゴリズムを絶えず発達させていくように、バックプロパゲーションの発想を自らに適用し、自分の内側のアルゴリズムを絶えず発達させていく営みに従事する。機械的かつ有機的にそれを実行していく。そのような必要性をふと感じた。2017/7/27（木）

No.1: The Ultimate Reality

The crystal clear blue sky above Groningen is whispering. Can you hear the voices derived from the truth beneath the whisper? If not, you miss something important in our lives. The sky always crucifies me but at time same time always emancipates me. The crucification and emancipation are not separable. They merge into the one, liberation. Why are we apt to see one partial dimension of the reality? The aptitude might be one of our inherent propensities. However, we have to dissolve the inclination into the vast ocean. Our reality is an oceanic creation of time and space. Yet, we should not forget that the ultimate reality is beyond such an amalgamation.
Thursday, 8/3/2017

1357. オランダ政府への感謝

昨日の天気予報は晴れを示していたのだが、実際には今日は終始雲が空を覆っていた。そうした中、私は午前中の仕事を終えた後、ランニングに出かけた。もし天気が快晴であればより爽快な気分になったのだろうが、それでも身体を動かすことは爽快さをもたらす。ランニングの帰りに、いつもトレーニング後に立ち寄るインドネシアンレストランに行き、昼食を購入して持ち帰ることにした。

自宅に向かう最中、一つ重要な気づきが姿を現した。それは論文を執筆することに関してか、あるいは仕事の進め方に対する態度に関してかのどちらかだったが、具体的な内容を覚えていない。重要な気づきが自分の中を通ったという跡だけが内側に残っているような感覚がある。この気づきは、再びしかるべき時に自分の内側に現れることになるだろう。しかも、その時の気づきは今日のものとはまた違う深度を持ったものであるはずだ。

早朝に、南アフリカの哲学者ポール・シリアーズが執筆した“Complexity & Postmodernism: Understanding Complex Systems (1998)”の残りの半分を読み終え、米国の哲学者かつ認知科学者でもあるジェリー・フォーダーが執筆した“The Modularity of Mind (1983)”を読み終えた。前者の書籍は私の現在の関心にとても合致していたのだが、後者はそうではなかった。昨年に途中まで一読し、そこから先を読み進めるのを止めていたのがなんとなく理解できた。今の私の関心を踏まえてみても、やはりフォーダーのその書籍は今読むべきものではないのだと再認識した。

どんよりとした雲を眺めながら、昼食を摂った。そのインドネシアンレストランでいつも持ち帰ることにしている“Nasi Rames”は極めて美味しい。味と量ともに申し分なく、実際には量が多いため、一回の昼食では食べきることができず、いつも次の日の夜に残りを食べることにしている。いずれにせよ、このレストランを勧めてくれた友人のニックには感謝しなければならない。昼食後、Eメールを確認すると、オランダの文部科学省から連絡が届いていることに気づいた。

昨年は、オランダの文部科学省から返済義務のない奨学金を支給してもらい、フローニンゲン大学での研究をする上で非常に助かった。昨年の奨学金は留学生を対象にしたものであり、それは原則一度しか支給されない。しかし偶然にも、二年目に所属するプログラムが教育関係のものであり、今年は教育関係の奨学金に応募できる可能性があることを数ヶ月前に知った。その奨学金が日本人にも支給されるのかどうかを確認するメールを、オランダの文部科学省に先週送っていた。

その返事が先ほどあった。どうやら幸いにも、日本人に対してもこの奨学金が支給されるそうだ。金額は昨年のものよりも少ないが、一年間の食費を賄うほどのものであり、そうした奨学金をいただけるだけでも有り難いことである。必要な手続き書類がメールに添付されてあったので、オランダ語を英語に翻訳しながら記入を進めた。

アドバイザーのサインと大学の印がいるようなので、八月末に新しいアドバイザーであるマイラ・マスカレノ教授のオフィスに足を運ぼうと思う。一年目のみならず、二年目においても奨学金が支給されることになると、いよいよ私はオランダに対して本当に恩返しをしていかなければならないだろう。特に二年目の研究は、フローニンゲン大学のMOOCに関するものであり、その研究成果をフローニンゲン大学の教育のみならずオランダの教育に還元していきたいと強く思う。

奨学金の支給に必要な資料を記入し終えた後、森有正著『デカルトとパスカル』の残りの数章を読み進めることにした。先ほど全てを読み終えたのだが、日本語がほとんど頭に入ってこなかった。とりわけ、「パスカルにおける「愛」の構造」の章を深く理解したいと思っていたのだが、単に字面を追うだけに終わった。パスカルの思索方法に関する章は大きな共感の念を持って読み進めることができたのに対し、パスカルの愛に関する思索は、今の自分には時期尚早であったのだと思われる。

本書を本棚にしまい、またしかるべき時に本書を紐解くことにしたい。夕方からはオンランゼミナールに向けた準備をし、それが終われば、ローレンス・コールバーグが執筆した論文“Development as the Aim of Education (1972)”を読み、今日の仕事を終えたいと思う。2017/7/27(木)

No.2: The Time Has Come

The time has come, which is what I most wanted to avoid. My mother tongue and other natural languages began to mingle. It is not an integration but a mere fusion. I have no idea of why it happened to me today. However, this phenomenon might have been inevitable. The gist is whether I can overcome such an invincible force. If I can transform the “latitude” of the current place into the “gratitude” of the reality at this moment, I will find the second meaning of latitude, which is liberty. Thursday, 8/3/2017

1358. 微風駆け抜ける世界の中で

ちぎれ雲がゆっくりと空を移動している。雲の向こう側には早朝の青空が少しばかり顔を覗かせている。小さな鳥が羽を小刻みに動かしながら東の方角へ飛び去っていった。遠くの空に見える雲の頭の部分が、朝日に照らされて白く輝いている。

「そうだったのか」という声が思わず漏れる。地上からその雲を眺めると、それは灰色に見えた。しかし、ひとたびそれに光が当てられると白く輝いて見えるのだ。光が当たらない時の雲は少しばかりどんよりとした灰色を放ち、光が当たっている時のそれは白く美しく輝く。果たしてどちらが雲の本質的な色を表しているのだろうか。おそらくそのどちらもが雲の本質的な色を示しているにちがいない。雲も光と影を持つのだ。この点は人間も同じだ。

光を浴びながら動く雲、光が当たらない時でも動く雲は、励ましを少しばかり私に与えた。光の時代の最中に、自らの進むべき方向に足を進めるだけではならない。影の時代の最中であったとしても、自らの進むべき方向に足を進めていくこと。これが大切だ。

影の時代にあっても進む雲を見守っている自分が今この瞬間にいるように、影の時代にあっても進む自分を見守る存在が必ずいる。少なくとも、今、影の時代の日々を毎日歩んでいる自分を、私は常に見守り続けている。最後の最後の日が来るまで、私は自分を見守り続けたいと思う。自らが自己の守護を務めるからこそ、自分が自分を絶えず見守っているからこそ、私は毎日の一歩を進めていけるような気がするのだ。

微風が早朝の世界を駆け抜ける。あのように世界を颯爽と駆け抜けることができたら、どれほど爽快だろうか。そして、どれほど先へ進めるだろうか。だが、私は一歩一歩しか進めない。世界を駆け抜けていく微風になることを望んではならない。微風と共に、この世界を自らの足で一歩一歩進むことが何よりも大切なのだ。

グレン・グールドの演奏するバッハのゴルトベルク変奏曲が書斎の中に溶け出している。アリアが生み出す静かに進行していく音の流れ。

遠くの空をただただ眺める。肉厚感のある入道雲が朝日に照らされる姿はやはり美しい。ゴルドベルク変奏曲第14変奏が、書斎という小宇宙の中を走りに走る。

今日もまた、自分の一歩を進めることができればそれだけでいいのだという気持ち。他の誰でもなく、自分の一歩を進めることができるかどうか。道のない場所に自らで道を作り、その道の上を自らの足で歩むのだという気概。自らの道の上を自らの足で歩むことができるということは、どれほど幸福なことだろうか。この幸福感に包まれながら、今日という一日を大切に、そして存分に生きたいと思った。
2017/7/28（金）

No.3: After The Endless Deconstructive Reconstruction Process

As Immanuel Kant constructed his magnificent philosophical systems in an architectonic way, I would like to do the same. As Johann Sebastian Bach and Ludwig van Beethoven created their

splendid music in a constructive manner, I would like to do the same. However, a thorny way lies ahead of me. Whereas I do not find a proper approach to tackle this difficulty, all I can do is continue the process of deconstructive reconstruction. After this endless process, I can finally see my own architecture. Thursday, 8/3/2017

1359. 金曜日に思う作曲

金曜日。今日は金曜日だ。今日は金曜日だったのだ。

てっきり今日は木曜日だと思っていたのだが、今日は金曜日だった。そうした確認をしなければならないほどに、曜日感覚が消失しつつある。というのも、夏期休暇に入って以降、とにかく自らの探究リズムの中に自己を据えて生活を送っているからだ。そのリズムに沿わない形では生きない。

自分が創出した音の組み合わせが奏でるリズムの中で生きること。他者や社会が作ったリズムに惑わされずに生きること。それが何より重要だ。

早朝に起床してみると、室内に寒さを感じた。起きた瞬間に、体に何か羽織るものを身につけようとするのは、冬の時代の行動を彷彿とさせた。焦らずともその時代は再びやってくる。幾重にも折り重なった、張り詰めらた糸を持つあの世界がまたやってくる。内側の世界と外側の世界を圧縮凝縮し、本質をさらけ出すことを突きつけてくるあの冬がまたやってくる。その足音はもう直ぐそばに聞こえている。

昨夜は、作曲の学習を行っていた。上の階に住むピアニストの友人から楽典のテキストを借り、それを用いて学習を進めることにした。作曲に関しても、日本語よりも英語で学習を進めていくことの方が楽だと思っていたのだが、借りた日本語のテキストを用いて昨日から学習を進めることにした。

バッハもベートーヴェンも、こうしたテキストを用いることなく作曲の探究を行い、直接的に他の作曲家の作品から作曲技術を獲得し、己の技術を磨いていったのは知っているが、最低限の知識はやはり必要だ。特に私のように音楽教育を受けていない者にとっては、最低限の知識は作曲を行うための不可欠な基礎となるだろう。

だが、もう一度明確にしたいのは、他者が生み出した曲を分析し、それを研究することについても関心はあるが、それよりも自分の曲を生み出したいという強い思いがあることを忘れてはならない。他者の作品を研究するためでも鑑賞するためでもなく、自らの作品を生み出すために、楽典の学習を進めるのだということを再確認したい。

最低限の知識を得ることができたら、あとは実際に自分の手を動かしながら小さな作品を次々に生み出していくことが重要だ。昨日の夕食中に、一曲あたりの合計の節を例えば100節と決めておいて、その枠の中で曲を作っていくということを考えていた。あるいは、最初のうちはその半分の50節でもいいかもしれない。さらにはその半分の25節の中で、自らの内側に存在する、音として表現を待つものをどれほど形にすることができるのかを探究したいと思った。

このような形で小さな曲を多数作りながら、自らの作曲技術を少しずつ高めていく。それと並行して、偉大な作曲家の作品を、今私が偉大な学者の論文や専門書を読んでいるのと全く同じように、生きた作品から音楽言語を直接的に学んでいく。テキストの中で分解された曲の部分を通してではなく、生きた曲全体から作曲の真髄を学んでいくのだ。一つの曲は生命と同じであり、部分に分解された瞬間にそれは生命力を失う。

また、人間が自然言語を他者との生きた会話から学んでいくように、生きた作品との対話から直接的に音楽言語を学んでいく。部分の単純総和は全体ではないということ、人間は文法書から言語を学ぶわけではないということを再度念頭に置く必要がある。

通り雨が過ぎ去っていった。バッハが残したゴルトベルク変奏曲アリアが静かに書斎の中に鳴り響く。今この瞬間の、何かが過ぎ去った後の静寂な感覚。その静寂さの感覚の中で、新たな活動に従事していこうとする小さく燃えるような感覚。これらの感覚をそのまま音に表現したいと強く思う。2017/7/28（金）

No.4: Rapprochement Between Us

You do not understand my world whereas I do not understand your world. However, is that really true? I apologize that I have not attempted to understand your world. My another apology is that I have not shared my world with you. Both of my two indolences generated a disastrous disparity

between us. I swear that I will devote myself to fill the catastrophic gap between us. Once the unfathomable chasm is filled up with our mutual understandings, we can see a growing rapprochement between us. Thursday, 8/3/2017

1360. ゴールデンゲートブリッジでの思い出より

今朝はとりわけ寒い。書斎の窓を開けていられないほどに冷たい風が吹いている。

先ほど、灰色の雲から通り雨が落ちてきたが、今は雨が止み、空に晴れ間が顔を覗かせている。書斎の窓を閉め、再び机に向かおうとした時、コーヒーの香りが部屋に立ちこめていることに気づいた。とても良い香りだ。このような寒い日には暖かいコーヒーに限る。コーヒーを片手に私は再び仕事に戻ろうとした。すると、このコーヒーの香りと部屋の寒さが共鳴し、一つの記憶を私に思い出させた。それは私が、サンフランシスコに住んでいた時のものだった。

ある時、大学時代の友人が日本からサンフランシスコに遊びに来てくれたことがあった。誰か友人が来るたびに、私は観光案内の一つとしてサンフランシスコ市内のサイクリングを行っていた。市内の北東部にあるピア39を出発地点にし、フィッシャーマンズワーフを通り、ゴールデンゲートブリッジを渡ってサウサリートに行くサイクリングコースである。その時もこのコースに沿ってサイクリングを友人と行うことにした。

あの日も今日と同じように夏の朝だった。早朝にピア39を出発し、ゴールデンゲートブリッジに着く頃には日がずいぶんと昇っていた。サンフランシスコ市内は夏でも涼しいのだが、ゴールデンゲートブリッジの上は涼しいというよりもかなり寒い。その時、私は上に何も羽織るものがなく、半袖のままゴールデンゲートブリッジを渡っていた。

自転車を漕いでいる時には寒さをそれほど感じることはなく、橋を渡り切り、サンフランシスコ市内を一望できる休憩所に無事に到着した。そこで友人が市内を写真に収めている最中、私も立ち止まって、遠方に見えるサンフランシスコの街の姿を眺めていた。しばらくその場に立ち止まっていると、寒さで体が震え始めた。写真を撮影していた友人の姿を見失い、彼はまだどこかで写真を撮り続けているようだった。

濃い霧のかかった休憩所で、私が全身を震わせていると、目の前に停まっていた車から一人の米国人女性が降りてきた。寒さで震えていた私を見て、親切にも、ジャケットを手渡してくれたのだ。その申し出に対して、最初私はお礼を述べながらも遠慮していた。というのも、その女性はジャケットを私に貸そうとするのではなく、私にくれようとしていたからだ。

「ほら、震えているでしょう。持って行って」という言葉を最後に、私はそのジャケットを受け取った。その言葉を残して彼女は車の方に去っていった。その米国人女性はそれほど私と年齢が変わらないように思えた。当時の私はあのような優しさを持っていたであろうか。今の私はあのような優しさを持って人に接することができるだろうか。

残念ながら、今はもうそのジャケットは手元にない。しかし、その女性の親切心のぬくもりは私の記憶の中から消えることがない。

今後も、ゴールデンゲートブリッジを訪れるたびにこの記憶が蘇ってくるだろうし、寒さを感じる日にはふとこの思い出に浸る瞬間があるだろう。フローニンゲンの今朝の寒さは、人とのつながりを感じ、人の親切心に触れるという温かい記憶を私に思い出させてくれた。2017/7/28（金）

No.5: “Ness-ness”

A glorifying symphony is valiantly walking in my study. The music resonates with my existence. I appreciate very much a person who coined the term “suchness.” Who was the Westerner to create the word? Suchness seems to capture most of what I feel right now, but it does not grasp my present feeling perfectly. It is almost and very close. Phenomenologically, “ness-ness” embraces everything that is going on within me here and now. Thursday, 8/3/2017